

産経新聞

ユーラシア地政学がめまぐるしく変動している。その立役者は、ロシアのプーチン大統領である。まず、次の3つの現象を見ていただきたい。

第1は、2015年10月にカ

カスピ海沿岸の反露国家であるアゼルバイジャンやトルクメニスタンを含めて震撼させた。第2は、ロシアがシリア作戦に際して、自領の北方フカスでなくイランのハマダン基地を利

連諸国で構成する集団安全保障条約機構(CSTO)の軍事訓練が実施されたことだ。北大西洋条約機構(NATO)や欧州連合(EU)への牽制もさることながら、ベラルーシやアルメ

投票によるEU離脱と欧州の混乱を見逃さなかった。英国と独自の亀裂は、NATO内部の対立でもあり、米国の困惑をも招いた。これは、プーチン氏にとって、クリミア併合などウクライナ問題を含めた対露制裁をか

撃墜を機に悪化していたトルコとの関係は、8月9日のプーチン氏とエルドアン大統領とのサングトペテルブルク会談で大きく正常化に向けて動き出した。これは、互いに有数の貿易・観光パートナーであり天然ガスの需給相手である両国が対立を続けられ、ともに最大の国益を米欧に侵される危険に気づいたからだろう。

向けて攻勢に出ているシリア・クルド人の攻勢を撃退し、大クルディスタン成立の危険を何とかも排除したいのだ。そのために、シリアの陸上戦への軍事干渉に踏み切ったのである。いずれにせよプーチン氏は、外交利益のためにハードパワーとソフトパワーを使い分けながら戦略的に思考できる政治家である。9月2日にウラジオスト

歴史の交差点

明治大特任教授 山内昌之



スビ海艦隊がシリア国内の「イスラム国」(IS)の拠点对して、高精度巡航ミサイルを発射し、1500キロ離れた地点に着弾させたことだ。この高い軍事技術は、その戦略性と並んで、アトランティク国境において旧ソ

タジキスタン、キルギスタンといった中央アジア3国が部隊を派遣したことは注目される。これらは別個の事象に見えるが、実は共通点をもっている。特にプーチン氏の打った最近の

わす絶好の機会であった。奇貨居くべしとばかりに、シリア戦争ではアサド政権を温存する講和路線に固執し、米欧の惑乱をよそに休戦合意を無視して戦火を拡大させている。他方、昨年11月のロシア軍機

すなわち、ロシアのウクライナ問題は、トルコのクルド問題と同じく、国家の枠組みや国民の歴史的成り立ちと関わっており、外交的に簡単に妥協できない性格をもっている。トルコもシリア北東部からトルコ国境に

踏まえた日本外交の戦略的展開が期待されることである。(やまうち まさゆき)

ユーラシア地政学の変動

(やまうち まさゆき)